

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

トラブルを避ける技法：  
オーストラリア中央砂漠におけるアナングの「酒狩り」の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): Australia   hunting and gathering   drinking alcohol   Aboriginals   trouble 作成者: 平野, 智佳子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010031">https://doi.org/10.15021/00010031</a>

## トラブルを避ける技法

—オーストラリア中央砂漠におけるアナングの「酒狩り」の事例から—

平野 智佳子\*

### Ways to Avoid Trouble: A Case Study of Anangu Liquor Hunting in the Central Desert of Australia

Chikako Hirano

本稿では、オーストラリア中央砂漠におけるアナングの狩猟採集を想起させる酒の獲得、すなわち「酒狩り」の過程に焦点をあて、規制や批判をかわすために重ねられる様々な調整や工夫を分析する。

従来のアボリジニ研究では、アボリジニ飲酒者は「植民地主義の犠牲者」として描かれ、その行為は文化喪失の言説に還元されてきた。これに対して本稿では、酒を手に入れようと奔走するアナングの諸行為を「ブラックフェラ・ウェイ」というアボリジニ独自の選択や決断に関わる議論に照らして、狩猟採集を装うような創意工夫として読み解く。それらの創意工夫によって人びとはトラブルの芽を摘みながら、協力者を見つけ、酒を獲得する。同時に、社会関係を維持・再生産して自らが逸脱していないことを示す。これらの分析から、酒を求めるアナングが、社会規範に追従するわけでもなく、かといって自らの飲酒欲求に翻弄されるのでもなく、両者のバランスをとりながら酒を獲得する術を編み出していることを指摘する。

This paper focuses on the process of “liquor hunting,” or the acquisition of Anangu liquor, reminiscent of hunter-gatherers in the Central Australian Desert, and analyzes the various adjustments and innovations that have been layered to fend off regulation and criticism.

Conventional Aboriginal studies have portrayed Aboriginal drinkers as “victims of colonialism” and reduced their actions to a discourse of cultural

---

\*国立民族学博物館

**Key Words** : Australia, hunting and gathering, drinking alcohol, Aboriginals, trouble  
**キーワード** : オーストラリア, 狩猟採集, 飲酒, アボリジニ, トラブル

loss. In contrast, this paper reads the Anangu actions of struggling to obtain alcohol as a type of ingenuity that utilizes hunter-gatherer knowledge and skills in light of the “Blackfella Way,” a discussion of unique Aboriginal choices and decisions. Through such creativity, people find collaborators and acquire alcohol while nipping trouble in the bud. At the same time, they maintain and reproduce social relationships and show that they are not deviant. These analyses suggest that Anangu who seek alcohol neither follow social norms nor are at the mercy of their desire to drink but rather strike a balance between the two and develop their own ways of getting alcohol.

1 はじめに	4 酒狩りの過程
1.1 本稿の目的	4.1 小集団の編成
1.2 問題の所在	4.2 協力者探し
1.3 本稿の視角	4.3 離合集散
2 フィールドの概要	4.4 日常に埋め込まれた娯楽
2.1 調査地	5 トラブルを避けるための工夫
2.2 調査対象	5.1 隠語とごまかし
2.3 調査方法	5.2 他者への配慮
3 アナングの酒狩り	5.3 協力者の確保
3.1 酒狩りとは	6 規範と飲酒欲求の両立
3.2 酒狩りと都市	7 おわりに
3.3 酒狩りをめぐるジェンダー	

## 1 はじめに

### 1.1 本稿の目的

オーストラリアの北部準州において先住民の飲酒は喫緊の国家的課題となっている。1980年代以降、北部準州の1人当たりのアルコール消費量は全国平均を大きく上回っており、泥酔者による事故や事件がメディアで連日のように取り沙汰されている。とりわけ、中央砂漠の飲酒状況は深刻で、アルコール関連政策の変遷は目まぐるしい(Clifford et al. 2021)。だが、それは先住民社会に酒をめぐる社

会規範が存在しないことを意味しない。アナング社会では酒が好まれる一方で、よくないものとみなされる。相反する規範と飲酒欲求を前に、アナングはトラブルを回避しながら酒を手に入れている。

酒を手に入れるためのこの一連の行為を、本稿では「酒狩り」と呼ぶ<sup>1)</sup>。その諸行為は狩猟採集を想起させるもので、日常との連綿としたつながりの中にある。酒狩りの過程では、規制や批判をかわすための様々な調整が重ねられる。本稿では、それらの調整の方法を「ブラックフェラ・ウェイ (blackfella way)」と呼ばれるオーストラリア先住民独自の選択や決断の議論に照らし、社会規範と飲酒欲求の狭間に生み出されるアナングのトラブルを避ける技法について検討する。

## 1.2 問題の所在

初期オーストラリア人類学において、その関心はアボリジニの社会組織に向けられ、酒は副次的に語られるにすぎなかった (Durkheim 1952)。1970年代にはじまった酒に関する人類学的研究では、主に酒の連帯感を深め、社会関係を円滑にするといった肯定的な側面が中心に描かれた (Beckett 1964; Collmann 1979)。

ところが、アルコール政策研究者・社会学者ルーム (Room 1984) によって、飲酒の否定的な影響を矮小化する民族誌記述が批判されて以降、飲酒自体を問題として焦点化する研究傾向が強まり、植民地主義批判が展開されるようになった。オーストラリア先住民研究も同様の流れで、1990年代には酒を持ち込んだ入植者への批判が高まった (Kahn et al. 1991; Hunter 1993; Moore 1992; Saggars and Gray 1998)。こうした傾向は、2007年に発表された北部準州緊急措置によってより一層強まっている。北部準州緊急措置とは、アボリジニ・コミュニティを対象とした福祉改革をうたったものである。連邦政府は改革を進めるにあたり、1975年に制定された人種差別撤廃条約の一時停止やアボリジニ・コミュニティへの入域許可制の廃止、コミュニティ地域の5年間の強制的リースを実施した。この北部準州に暮らすアボリジニを対象とした政治主導の介入は、彼らの自主性を損ねるものであると国内外で物議を呼び、規制をめぐる政治的な意見のぶつかり合いに研究者らの注目が集まった<sup>2)</sup> (平野 2013; 2015)。そこで主に議論されるのは、植民地主義の功罪であり、「犠牲者」であるアボリジニに対する適正な支援のあり方である<sup>3)</sup>。

これに対して、筆者が調査地の中央砂漠で目の当たりにしたのは、単なる被支援者に留まらず、飲酒トラブルを回避しながら酒を飲み続けるように工夫をこらす人びとの姿であった。中央砂漠では多くの人びとが口を揃えて「酒はよくない」と語るが、他方で周囲の人びとから非難されないように、様々な工夫をこらしながら酒を手に入れていた。こうした微細な工夫は、先住民の新たな選択や決断といえる。だが、飲酒に関しては、暴力や虐待、健康被害などの否定的な影響が目立つ中で、先住民と非先住民の二分法を前提とする研究に主軸が置かれ、先住民社会内部で人間関係を調整するような、日常生活の微細なやりとりが看過されている（平野 2013）。

### 1.3 本稿の視角

変化に適応しようとする人びとの日常的な工夫や調整の仕方は、アボリジニ研究では「ブラックフェラ・ウェイ」という概念によって議論されてきた（Schwab 1991）。それは白人とは異なるアボリジニ独自の選択や決断を意味する。その在り様は地域や集団によって多様であるが、共通して語られるのは、狩猟採集や儀礼、生活行動を通じて自分たちのカントリーで継承されてきた思考の流れである。カントリーとは、アボリジニの父系クランの祖先が暮らしてきた土地のことをいう。その土地そのものと地形、泉、動植物などは祖先の精霊が旅の途上で作りだしたもので、人びとはその物語をうたい、踊り、語る。そこに派生する思考の流れに沿うかたちで、アボリジニの行動や態度が方向づけられる。シュワブによると、この脈々と受け継がれてきた思考の流れはハビトゥスであり、あらゆる場面に立ち現れるものである。

一方、ブラックフェラ・ウェイは先住民アイデンティティをめぐる問題に結びつけられて議論されてもいる。例えば、栗田は、オーストラリア南部アデレードに暮らすヌンガの事例から、彼らが相互扶助行為を「ヌンガ・ウェイ」として重要視するが、必ずしもその規範に追従するばかりでなく、アボリジニ・コミュニティからの完全な孤立を防ぐために戦略的に相互扶助行為を演出していることを指摘した（栗田 2018: 299）。ここで重要なのは、相互扶助が慣習としておこなわれるというよりは、主流社会に対してアボリジニとしての自己を提示するために意識的に演出されているという点である。

この点を踏まえると、ブラックフェラ・ウェイは、アボリジニがオーストラリアに順応し、対抗し、自らを主張し抵抗する中で積み重ねてきた独自の選択や決断であり、ポスト植民地時代を生き抜く術として捉えることができる。ところが、酒をめぐる諸行為に関しては、ブラックフェラ・ウェイの議論で扱うのは「非常に困難である」といわれる（松山 2006: 196）。その理由として松山は、暴力や薬物・アルコールの乱用など、アボリジニの選択や決断の中にはアボリジニ自身が容認しかねるものがあることに言及し、アボリジニの間のモラルの低下や暴力、性的虐待といった問題をブラックフェラ・ウェイで捉えることの限界を示している（松山 2006: 195）。

たしかに酒を手に入れようとする人びとの行為を彼らの選択や決断と位置づけることは、飲酒の問題を肯定しているような印象を与え、先住民の権利運動の足かせになるのではないかという心配を呼び起こす。人類学、特にオーストラリア人類学は、1970年代後半より植民地主義に加担した過去を糾弾されてきた。以来、研究者には、インフォーマントのためにおこなう「協働の人類学」が要求されている。オーストラリアでは1976年の土地返還請求を皮切りに、先住権、政府機関のアボリジニ政策に関連する多数の交渉・調停が持ち上がると、アボリジニ研究のニーズは飛躍的に増加し、アボリジニ社会のためにおこなう共同研究の意味合いが強まっている（大野 2009: 376-377）。

このような先住民当事者の声に寄り添う研究の姿勢はきわめて重要であり、本稿もその点を否定する意図はない。しかし、政治的な交渉の場だけでなく集団内部においても、外部者のやり方に迎合しない大半の人びとによる、メンバー間のトラブル回避のための独自の調整や工夫が重ねられている。この調整や工夫に通底する思考に、ポスト植民地状況を生きる人びとのブラックフェラ・ウェイを見出すことが可能だろう。

この点を踏まえて、筆者は中央砂漠に暮らすアナングのキャンパス（アボリジニ・アート）制作・販売の事例から、酒の購入資金を得るための彼らの工夫と調整について検討した（平野 2021）。そこで明らかになったのは、たとえキャンパス販売の過程で個人の利益追求に走ったとしても、身近な家族に対する配慮、気配りによって、関係の分断を回避するような工夫や調整がおこなわれているということであった。これらは公の場で発信されることはないが、成員間では「自分

たちのやり方」として認識される「ウェイ」である。

こうした工夫や調整は、今回、取り扱う酒の獲得のプロセスでも同様におこなわれる。ただし、酒を手に入れる過程で確認されたのは、身近な家族から酒を転売してくれる協力者にいたるまでの広範にわたる配慮や気配りであり、自らが逸脱していないことを示すためのより戦略的な演出であった。本稿では、こうしたブラックフェラ・ウェイの変化に注意を払いながらアナングの酒狩りのプロセスを検討し、「酒はよくない」という社会通念に折り合いをつけながら酒を獲得する術を考察する。そこから、ポスト植民地状況を生きるアボリジニの新たな選択や決断を照射したい。

## 2 フィールドの概要

### 2.1 調査地

オーストラリアの中央砂漠は「デッド・センター (Dead Centre)」とも呼ばれる、辺境の荒涼とした土地である。その過酷な環境から、長らく白人による開拓は進められてこなかった。そのため、中央砂漠のアボリジニ社会では沿岸部に比べて、慣習や儀礼が色濃く残る「伝統」的な暮らしが営まれている。

筆者が調査の間、拠点を構えたのは、中央砂漠に位置するイマンパ・コミュニティである<sup>4)</sup>。中央砂漠にはおよそ 20 のアボリジニ・コミュニティが点在しており、その中の 1 つ、イマンパ・コミュニティの人口は約 150 人である。イマンパ・コミュニティから北東に約 270km、車で 3 時間ほどのところに中央砂漠の最大都市アリス・スプリングスがある。アリス・スプリングスの人口は約 28,000 人で、そのうちアボリジニ居住者の数は約 1,200 人である。アリス・スプリングスには近隣のコミュニティからアボリジニが頻繁に訪れる。その数を含めると、アボリジニ人口はおよそ 2,000 人に膨らむ。

アリス・スプリングスに滞在中、彼らは買い物をしたり、アリス・スプリングスに暮らす家族の家に訪問したり、路上で絵を描いて売ったり、木陰に集まって家族とともに時間を過ごすなどしている。酒の獲得は、これらの営みの背後で密かに進められる。

アリス・スプリングスは世界遺産のウルル（Uluru）へ向かう観光客のゲートシティであり、中心街にはパブやレストランが軒を連ね、観光客で賑わっている。アリス・スプリングスでは飲酒規制、とりわけアボリジニに対して厳しい管理や監視がおこなわれているが、コミュニティとは異なり、観光客や都市に暮らす非先住民の友人を介して酒の購入が可能であるため、酒狩りが盛んにおこなわれる。

## 2.2 調査対象

主な調査対象はアナングを自称・他称とする人びとである<sup>5)</sup>。その家族構成は、オーストラリア主流社会における標準的な核家族（夫婦とその子）とは異なり、土地にまつわる物語を基礎とする父系出自集団から成り、それらの物語は儀礼の歌や踊り、絵、言語を通して共有される。ただし、今日では非先住民や異なる地域集団間の通婚も増え、婚姻関係が多様化していることから、実際にその家族構成は固定的なものではなく、その時々に応じて変動することもある。

アナングは長らく狩猟・採集を基盤とした遊動生活を続けてきた。この遊動生活とは特定の土地に留まり積極的に農耕をおこなって将来のために食料を生産するというものではなく、自然環境より得た食物や資源に強く依存する生活で、その場所の資源がなくなると別の場所へ移動するといったものであった。こうした遊動生活は、1930年代のキリスト教ミッション設立以降もアボリジニの文化や社会を保護する動きのもと抑止されることなく継続された。

アナングの暮らしが大きく変化したのは1960年代である。鉱山開発にともない、開拓者による入植が進み、酒の流通が急増した。同時期、市民権の獲得によって差別的な法規制が次々に撤廃され、先住民も福祉サービスの対象者となった。これにより生活給付金の受給が開始され、貨幣経済化の進んだアナング社会では酒が一気に広まっていった。そもそも飲酒の慣習がなかったアナング社会では、急激な飲酒量の増加にともない健康被害や暴力、虐待、育児放棄などの問題が生じ、中央砂漠はオーストラリアの中で最も飲酒状況が深刻なエリアにあげられるようになった。

これを受けて、1980年代後半よりアナングによる社会活動が活発化した。1990年代には中央砂漠の各地で禁酒運動が展開され、主に中年層のアナング<sup>6)</sup>がそれらの活動の中心的役割を担った。これらの活動はローカル色の強いものであった

が、当時の連邦政府は、自律自営政策のもとコミュニティにおけるあらゆる判断を先住民に委ねる方針をとっており、彼らの判断は基本的に尊重された。

ところが、1990年代後半、対先住民政策を縮小する方向に改変するハワード保守連立政権へと政権交代し、アボリジニの主流化が推し進められた<sup>7)</sup>。さらに、2006年、マスコミがアボリジニ・コミュニティ内での暴力や虐待を取り上げたことを機に、「アボリジニの子どもを救え」という感情的な議論が新聞や雑誌を中心に盛り上がりを見せた。この世論の高まりに背中を押されるかたちで、2007年、ハワード保守連立政権は北部準州緊急措置を発表し、北部準州のアボリジニを対象とする福祉改革を強行した。

この福祉改革はアボリジニの自主性を奪うものとしてアボリジニからの批判が相次いだ。しかし、福祉改革の1項目である飲酒規制だけは例外的にアナングを含め、多くのアボリジニから賛同を得た。これはコミュニティ内での過剰飲酒や暴力、虐待に頭を抱えている人が大半だったからである。こうした反応からみてとれるように中央砂漠では現行の飲酒状況の改善を求める人が多数派である。そのような飲酒に対する問題意識を共有する人びとが社会活動に取り組む傍らで、飲酒規制や監視の目をぬって日常的におこなうのが酒狩りである。

### 2.3 調査方法

本稿にかかわる現地調査は、2014年から2019年にかけての合計13ヵ月、実施した。主に英語と部分的に現地語のヤンクンチャチャラ (*Yankunytjatjara*) を用いて参与観察、聞き取り調査をおこない、文献資料で補足した。調査開始当初、筆者は酒の購入を代行することもあったが、親しくしていた禁酒主義者のアナング女性から注意を受けたことをきっかけに、代行の手伝いを断るようになった<sup>8)</sup>。以降、単なる車の運転手として酒の入手につきあいながら、彼らがどのように酒狩りをおこなうのかを調べるようになった。そのため、本稿でとりあげるデータは、筆者自らが彼らの遊動の手助けをする中で得られたものであることを、あらかじめ断っておく。

### 3 アナングの酒狩り

#### 3.1 酒狩りとは

冒頭で述べたように、酒狩りとは、規制をかわしながら酒を手に入れることで、その過程は狩猟採集を想起させるものである。アナング社会では、古くから狩猟採集がおこなわれてきた。アナングは資源を求めて小集団を編成し、遊動しながら、状況に応じて臨機応変にメンバーを入れ替え、獲物を手に入れてきた (Rose 1965)。

こうした狩猟採集は、20世紀半ばすぎの狩猟採集民研究では、食料獲得の手段として捉えられた。だが、1990年代、社会システムの変容とともに生業としての狩猟採集の機会が減少していくと、飲酒やギャンブル、あるいは自分たちのアイデンティティを強化するような社会活動を通して、その行動様式が再構築されていることが指摘されるようになった (小山1996: 301; ピーターソン 2002: 268-270)。現代アナング社会では、狩猟採集は食料獲得の方法というよりは娯楽、あるいは「自分たちの生き方」を確認する場といった意味合いを持つようになっている。対象にも変化が見られ<sup>9)</sup>、土地固有の動植物に加えて、観光客が残した廃棄物や廃車の部品など活用できそうな外来物にも広がりを見せている<sup>10)</sup>。

そんな中で例外的に扱われるのが酒である。酒は他の外来物とは異なり、西洋由来の「毒」と評される。アナングの社会や文化を破壊するものとして警戒される酒は、狩猟採集の対象とはみなされない。アルコール研究の中には酒の消費が進む中で、狩猟採集が衰退したという指摘もある。オーストラリア北部のモーニングトン島で調査をおこなったマクナイトによると、若者が酒に溺れ、年配者と一緒に過ごす時間がほとんどなくなったため、伝統的なやり方を見て、聞いて、学ぶ機会を多くが失われているという (McKnight 2002)。若者の獲物を追跡する能力や足跡の読み方が年配者に比べて随分劣ってしまっているというマクナイトの指摘 (McKnight 2002: 55-56) は、獲物を追うという技術面の低下がみられるアナング社会の現状とも重なる。

他方、酒は生活の中でひとときわ高い関心を集めるものであるため、アナングの間では適正に酒を手に入れることが日々の生活を左右する主要な関心ごとにもなっ

ている。できるだけ円滑に酒を入手したい人びとは、親から子へと脈々と受け継がれてきた狩猟採集に近いプロセスをふみながら獲物だけではなく、酒を手に入れている。筆者の経験では、彼らの酒の獲得率はきわめて高く、規制や監視が強化される中で酒を獲得する技術はかえって向上しているようにも見える。

### 3.2 酒狩りと都市

次に、酒狩りがアナングの日常生活にどのように位置づけられているのかをおさえておく。酒狩りは岩石や礫、砂で形成される荒涼とした砂漠地が広がるブッシュではなく、観光客が集まり酒の流通が盛んな都市でおこなわれる。現在、イマンパ・コミュニティをはじめ、北部準州のアボリジニ・コミュニティでは原則、酒の持ち込みが禁じられている。近郊のロードハウス（幹線道路にある休憩施設）まで出かけると酒を飲めるが、多くの場合、購入できる缶数に上限がある等、独自の飲酒ルールが定められており<sup>11)</sup>、酒を好きなだけ飲むには、大量の酒が出回るアリス・スプリングスに出かけるのが最も都合がよい<sup>12)</sup>。アナングたちも酒を購入するための資金を得ると（あるいは、得なくても）、アリス・スプリングスに暮らす家族のもとに訪れ、数日あるいは数週間、滞在する。

アリス・スプリングスに滞在する人びと、特に中年層の多くが酒狩りに興じる。アリス・スプリングス内でも飲酒規制がしかれているため、酒狩りは一筋縄ではいかない。アリス・スプリングスでは、1979年の北部準州酒類法（NT Liquor Act）を皮切りに、飲酒規制が改正を繰り返しながら継続的に施行されてきた（Clifford et al. 2021）。さらに2008年に北部準州緊急措置が施行されてからは、コミュニティ内の飲酒を禁じられたアボリジニたちが酒を求めてアリス・スプリングスに流入したこともあり、飲酒規制の強化が進んでいる（平野 2015）。

調査当時の飲酒規制の内容は次の通りである。アリス・スプリングスでは、家や庭などの私的空間やホテル、レストランなどの許可がおりている場所で飲酒することは可能である。ただし、アボリジニの集住地区や共同住宅は禁酒区域に設定されているため、これらの区域に居住している人びとは「家飲み」ができない。加えて、公園や公道での飲酒、いわゆる「外飲み」も禁じられている。例えば、アボリジニが好んで過ごす、市中を蛇行するトッド川の河川敷での飲酒はできない。

「家飲み」も「外飲み」もできない人びとは、バーやクラブで合法に酒を楽しむ

む。しかし、店内飲酒はコスト・パフォーマンスがよくないため、バーやクラブで飲むよりも酒屋で大量の酒を購入し、集団で酒宴を開くというスタイルが好まれる。ただし、酒屋の利用にも様々な制限がある。まず酒屋の開店時間は短い。月曜から金曜の午後2時から午後9時、土祝の午前10時から午後9時は開いているが、日曜は終日閉店している。さらに、開店中の酒屋の店頭には警察官が常駐しており、入店時には警察官に個人認証カード（運転免許証やパスポート、年齢を証明できるカードなど）を提示しなければならない。その際、現住所あるいは滞在先が確認され、禁酒区域に居住・滞在している者は酒屋への入店が許されない。アボリジニ・コミュニティからアリス・スプリングスに訪れる人びとは、滞在中、アリス・スプリングスに居住する家族のもとに身を寄せるが、そこはアボリジニ集住地区や共同住宅といった禁酒区域であることが多いため、滞在先の確認で不正を指摘され、酒屋に入店できないケースがほとんどである。

周辺のコミュニティから訪れるアナングは自らが酒屋に入店することができないため、酒を転売してくれる協力者をみつける必要がある。この協力者とは、観光客や友人、禁酒区域外に住む家族といった酒屋に入店できる不特定の個人である。人の行きかう都市では協力者と出会える確率も高いが、酒を求めるアボリジニも相当数いるため、協力者の確保にはそれなりの工夫と努力を要する。

酒狩りは通常、都市の酒屋が開店する頃にはじまる。酒狩りに参加するアナングたちは酒屋の開店時間が近づくと、小集団を編成し、転売の協力者探しをはじめめる。酒狩りは、メンバーの資金が尽きるまで断続的におこなわれることが多い。

### 3.3 酒狩りをめぐるジェンダー

酒狩りは男女入り混じっておこなわれ、その行為にジェンダーの差異はほとんど見られない。従来の狩猟採集研究の議論では、「狩りの主体=男性」という見方が一般的であり、女性の関与に関する記述は稀有である。これらの通説と同じく、かつてのアナング社会でも、基本的に女性が採集、男性が狩猟に従事し、中央砂漠で好まれる赤カンガルーは伝統的には男性が槍で捕まえてきた。女性は槍の使用を禁じられており、狩猟には参加していなかったといわれる（Bryce 1992: 34）。

ところが、アナング社会では、白人社会からライフルや狩猟犬が導入された頃から、女性の狩猟への参加が目撃されている。例えば、アナング女性たちが狩猟

犬を使って仕留めた赤カンガルーをキャンプに持って帰ってくる姿が確認されており、近年はライフルで赤カンガルーを撃っているという記録が残っている (Bryce 1992: 34)。実際の会話の中でも、アナング女性たちがカンガルーを仕留めたという話がよく聞かれる。MA (50 歳女性) は、20 代の頃から車を運転しライフルでカンガルーを撃っていたと話す。「狩りの仕方は母親から教えてもらった」という MA の発言から、その習慣が最近はじまった話でないことがわかる。アナング女性が狩りに参加した理由について、MA は次のように語る。

この辺りは、男がビジネス (儀礼) で長く土地を離れるから、その間、女が狩りをしていたのよ。昔はデインゴ狩りをする事もあったわ。デインゴは皮を売るだけで食べてはいないけどね。

(フィールドノート 2019 年 2 月 23 日)

デインゴとは、中央砂漠の牧場で羊を襲う害獣として知られる野生犬の一種である。中央砂漠で牧畜業が発展した 1930 年代には、デインゴ狩りがアナングの主要な現金収入になっていた (平野 2019: 167)。上記の MA の語りから、アナング女性が狩りの主体となることは現地の文脈において、それほど違和感のあることではないことがうかがえる。コミュニティの周辺では男女が入り混じって狩猟採集に向かう姿もよくみられる。同様に酒狩りの過程でも、男女が協働して酒を手に入れる。

以下、酒狩りの過程を詳しくみていこう。

#### 4 酒狩りの過程

アリス・スプリングスの路上で絵を描いていた MS (40 代女性) は、ショッピングバッグの中からワインの空き瓶をちらりとのぞかせ、「このワインを買ってきて」とささやいた。「どうして自分で買いにいかないの?」と聞くと「買えないのよ。ライセンスがないから。」と悲しそうな顔をする。そばに座っていた GK (30 代女性) も曇った表情でこちらをみる。「警察はいつも私たちを怪しんで追い払うのよ。ここは私たちの場所だったのに、今は警察が支配しているの。ねえ、私たちのことをいじめないで。」(フィールドノート 2014 年 6 月 17 日)。

#### 4.1 小集団の編成

都市アリス・スプリングスでは飲酒規制が施行されており、周辺のコミュニティから訪れているアナングは酒屋への入店が許されない。そのため、人びとは酒を譲ってくれる、あるいは転売してくれそうな協力者を見つけ出す必要がある。調査をはじめて間もなく、路上でアボリジニ・アートを描いていたアナング女性と顔見知りになった私は、上記のように声をかけられた。彼女たちの憂いに満ちた表情は、人種主義的な法規制の不条理を訴えかけるものである。観光客や都市住民の中には先住民の置かれる立場に同情を示す者も一定数いる。

とはいえ闇取引には逮捕される可能性もつきまとうため、必ずしも協力の承認が得られるわけではない。この不確かさを補うために、アナングは相互に助け合える仲間と小集団を編成する。アナングは日常生活において個人行動をとることはほとんどなく、基本的に協働して生計をたてている。こうした協働は「アナング・ウェイ」として認識されており、文化喪失が懸念される現在、その重要性はますます高まっている。

アリス・スプリングスに訪れる人びとは流動的であるため、小集団の構成も常に変動する。人びとはアリス・スプリングスへ自家用車か、ハイウェイ・バスで訪れる。自家用車だと近い家族が数名乗り合わせるが、ハイウェイ・バスだと単独で利用する場合もある<sup>13)</sup>。単独の場合は、アリス・スプリングスに到着するとすぐに都市に滞在している家族のもとに向かう。

アリス・スプリングス市内を移動していると、そこかしこでひっきりなしに家族に出会う。中でも家族と出会える可能性が高いのは「いつもの場所 (*same place*)」と呼ばれるたまり場である。いつもの場所には不特定多数のアナングが出入りしており、情報交換が活発におこなわれる。人探しをする際は、ここで得られた情報をもとに町中を遊動し、目当ての家族のもとに向かう。

遊動はアナングの情報収集の基盤でもある。アナング社会では携帯電話がかなり普及しているが、所持していたとしても、充電切れやクレジット切れ、紛失といった様々な理由でつながることが頻繁にある。携帯電話が使用不可の場合、市内の公衆電話が利用されるが、同様の理由で相手の携帯電話もつながることが多い。不安定な通話状況は不便なように感じるが、遊動と口伝えが活発なアナン

グの間では情報の拡散スピードが非常に速く、情報伝達にはそれほど支障はない。

アリス・スプリングスでの過ごし方は一様でないが、それぞれ用事をすませた後はたまり場に戻ってくることが多い。そこで女性たちはキャンバスを描き、通りかかる観光客に声をかけ販売する。男性たちは女性が仕上げた絵を売りにでかけたり、購入したソーセージや肉を公衆のバーベキュー台で調理したり、カード・ギャンブルに興じたりしている。女性も絵が仕上がるとそこに参加する。たまり場ではゆっくりとした時が流れる。ところが、酒屋が開店する午後2時が近づくとにわかには落ち着かない雰囲気になる<sup>14)</sup>。絵を描いている女性たちは時計を持っている私に何度も「いま何時だ？」と尋ねてくる。そして口々に「チャドネイ(シャルドネというブドウ品種の白ワインのこと)」とつぶやき、目が合うとにやりと笑う。そろそろ酒狩りにいく時間である。

### 事例 酒狩りにいく

2014年7月1日、週末にアリス・スプリングス・ショーという年1回の大イベントをひかえ、町全体が明らかににぎわっている。「いつもの場所」には10人以上のアナングが集まっていた。みな「ショーがあるからやってきた」という。午前中に集まってきた女性たちは、いつものように輪になって絵を描いていた。

午後2時をすぎると、MS(40代女性)が、乾かしていたキャンバスをいそいそと丸めて手提げカバンにしまい、「車を出せ」と目配せしてくる。続いて、MSとよく一緒に行動をともにする2名の女性、TB(50代女性)とJW(50代女性)もキャンバスをしまい立ちあがった。この3人は普段はイマンパに暮らす姉妹で、「トラブルメーカー(現地語のヤンクンチャチャラで「ランマ rama」)」と揶揄されることもある酒好きの女性たちである。

3人が立ち上がるのをみて私もいつものように運転席に乗り込む。すると当然のようにMSは助手席、TBとJWは後部座席に乗り込んでくる。もう一つ残っている座席に男性が乗り込もうとするが、後部座席に座っているTBが大声を出して追い払っている。結局、その男性は渋々残り、MSが指名したMSの兄DS(40代男性)が乗り込んできた。

乗車する人たち以外は特に顔をあげることもなく、そのまま絵を描き続けている。行き先は具体的に告げられることはなく、MSは「示す方向に行け」と指で

行先を示した<sup>15)</sup> (フィールドノート 2014年7月1日)。

この時、リーダーシップを発揮していたのは、筆者が最も懇意にしていたMSであった。MSが乗車を認めたのは、TBやJWなど酒の購入資金を持つ者や、DSのように転売の協力者に当てがある者であった。酒狩りへの参加を望む者は多いが、乗車定員には上限があるため、メンバーには酒狩りの助けになりそうな者が優先される。この日は現金と協力者など酒狩りの条件がそろっていたため、すぐに目的地へ向かったが、購入資金が不足していたり、協力者の当てがなかったりすると、市内を遊動し、それらを補うところからはじまる。

#### 4.2 協力者探し

酒の転売の協力者は、アリス・スプリングスに居住する家族や非先住民の友人、偶然に知り合った観光客といった人びとである。酒を求めるアナングたちは、酒の購入を代行してくれる、あるいは転売してくれる見込みのある人物のもとに向かう。酒購入の代行や転売は違法行為のため、誰でも協力者にはなってくれるわけではない。アナングは、個人的なつながりを頼って協力者探しに奔走する。

#### 事例 協力者とのやりとり

MSの指示に従い、しばらく車を走らせる。アボリジニ集住地区(タウンキャンプ)の「プライベート・セリング (*private selling*)」と呼ばれる協力者が暮らす家屋に向かっていくようだ。連日の酒狩りのパターンから、ある程度、行先の目星がつく。

MSはオレンジ色の家の前に車を停めるように言う。家屋の住民はDSの「友人」らしい。DSはTBやJW、MSから数枚の紙幣を受け取ると降車し、玄関口のイスに腰かけているそのアボリジニ男性に声をかけた。彼はDSから紙幣を受け取ると、家の中に入っていく<sup>16)</sup>。

しばらくすると、DSは2本の白ワインを抱えて戻ってきた。聞けば「1本20ドル」とのこと。同じ銘柄の白ワインは酒屋では約10ドルで購入できる。約2倍の値段だ。随分高くふっかけてくるものだと思ったが、4人は不満を訴えることもなく、車内で白ワインを開栓し、それぞれ手持ちの空きペットボトルに分け合っ

て飲んだ（フィールドノート 2014 年 7 月 1 日）。

酒の入手を手伝ってくれる者たちは「友人」あるいは「家族」と語られることが多いが、どういったつながりがあるのかは不明な点が多い。協力者の多くは、アリス・スプリングス市外にある先住民の集住地区や共同住宅などに暮らしている。プライベート・セリングには、大抵の場合、白ワインやビールがいくらかストックされており、それらが市場価格の約 2 倍で売られる。価格は固定ではなく、イベントなどでアリス・スプリングスに多くの人びとが集まる繁盛期には、需要が供給を上回るため、価格が 2.5 倍から 3 倍に跳ね上がることもある。禁酒区域である先住民の集住地区や共同住宅に暮らすアボリジニは本来、酒を購入できないはずだが、彼らは独自のルートで酒を入手し、家屋内に一定の酒をストックしているようであった。彼らの友人や家族が密かに酒を運び込んでいるという噂もあるが、誰に聞いても詳細は「知らない」という。

プライベート・セリングは、突然現れたり、なくなったりする神出鬼没な性格をもつ。中には転売を本業、あるいは副業のようにおこなっているところもあるが、大半が依頼主との個別の関係性の上で成立し、協力するかどうかもその場と状況に応じて判断される。

#### 4.3 離合集散

アナングはプライベート・セリングにたどりつくと、酒の転売交渉をはじめめる。うまくいけば、大量の酒が一举に手に入り、人目につきにくい場所、例えば、車中や茂みの中、家屋の裏庭などで酒宴がはじまる。しかし、酒の転売は必ずしも順調にいくわけではない。相手の気持ちや状況によっては断られたり、居留守をつかわれたりすることもあり、なかなか期待通りにはいかない。そうした時には、メンバーの入れ替わりがおこなわれ、新たな展開が期待される。

入れ替わったメンバーに別の協力者の心当たりがあればそちらに向かう。もし全ての人びとに断られてしまった場合は、世話をしてくれそうな家族を探しに行く。遊動しながらめぼしい人物をみつければ声をかけ、メンバーに誘い入れる。もし座席スペースが足りなければ既存のメンバーと入れ替えることもある。運転中の指揮は基本的に助手席に座る人物が執りおこなう。

酒狩りに難航した際に新たなメンバーとして歓迎されるのは、より広範な協力者ネットワークを持つ人物、つまり、アリス・スプリングスで酒浸りの毎日を送る「マッド・ピープル (*mad people*)」と呼ばれる人びとである。都市に居ついてコミュニティに戻ってこないマッド・ピープルは通常煙たがられるが、アリス・スプリングスで酒を獲得する際にはとても頼りにされる。彼らは酒狩りの熟達で、協力者探しにも長けているからである。

マッド・ピープルを誘いにいく時はまず「いつもの道 (*same way*)」に向かう。「いつもの道」とはアナングがアリス・スプリングスで好んで通るストリートの通称であり、そこを通れば必ずといっていいほど家族に出会える。目的地への最短ルートが他にあって、いつもの道を通るように指示される。反対に、家族に出会いたくない時にはいつもの道を避けるように言われる。いつもの道を行ったり来たりしながら通行人や車を観察し、マッド・ピープルがいるかどうかを確認する。

人びとは協力者を探すために遊動を続けるが、同時に煙草をもらいに行ったり、絵を売りに行ったり、買い物をしたり、様々な用事も並行してこなしていく。誰かに会う度に情報交換がおこなわれ、その都度、行先が変わる。こうして家族の情報を手がかりに遊動し続ける中で協力者に行き当たり、酒を手に入れるチャンスを得ることができる。無事に酒を手に入れた後も、現金さえあれば、十分な量の酒が手に入るまで遊動が続けられる。

#### 4.4 日常に埋め込まれた娯楽

以上のように、酒狩りの過程では、小さな集団で都市を遊動しながら酒を獲得していく人びとの姿がみられる。人びとの行動は、ウッドバーンが示した狩猟採集民の特徴を想起させるものである (Woodburn 1982: 434; 岸上 2003: 727)。

1. 社会集合は柔軟性に富み、その人的構成は常に変化している。
2. 諸個人は誰とともに住み、誰とともに狩猟採集をおこなうのか、誰と交易と交換をおこなうのか、誰と儀礼をおこなうかなどについて、個人的に選択することができる。
3. 生存に必要な諸資源へアクセスするために特定の他者に依存することは

ない。

4. 人びとの関係は分配や相互依存を強調する一方、長期にわたって特定の他者と特別な関係を維持したり、特定の他者に依存することはない。

これら狩猟採集民の行動パターンは、アナングの酒狩りの過程にみられる行動、例えば、協力者を探しに出かける際のメンバー編成、情報の共有、遊動や離合集散などに確認される。こうした状況について、ピーターソンは、アボリジニ・アートの商品化やアボリジニと貨幣との関わり方、そして、労働と土地の商品化の事例を通して、彼らが今もなお先植民地時代のパターンを想起させる独自の方法<sup>17)</sup>で、分配と消費、生産していると論じている (Peterson 1999: 67)。これは、国家の政策が彼らの社会・文化的な生活を損なうのではなく、むしろ強化しているという指摘であったが、アナングの酒狩りの過程もまた、飲酒の規制や管理が狩猟採集の知識やスキルが維持・再生産されているかのように見える。

さらに酒狩りは酒屋の開店を待って毎日、嬉々としておこなわれるような行為でもある。十分な量の酒が手に入っても、購入資金が枯渇するまで酒狩りを継続することからも、酒狩りは、実利のみならず、行為自体が大きな喜びの源であり、人びとの日常に埋め込まれた娯楽となっているといえよう。

それでは日々、酒狩りに興ずる彼らは狩猟採集の知識やスキルを利用して酒の快楽に溺れる逸脱者、あるいは社会不適応者なのだろうか。その答えはそれほど単純ではない。中央砂漠では酒を好む人でも、大半が口を揃えて「酒は毒」と語る。酒は「毒」だからこそ、より慎重なふるまいが求められる。次に、酒狩りの過程で重ねられるトラブルを避けるための人びとの工夫を考察する。

## 5 トラブルを避けるための工夫

### 5.1 隠語とごまかし

上記の事例でみてきたように酒を獲得するプロセスは狩猟採集のプロセスと重なっていた。酒狩りはアナングにとって日々の娯楽であるが、依存性、酩酊作用のある酒に溺れることはトラブルを引き起こすため歓迎されない。人びとは無用

なトラブルを生み出さないように、状況に応じて工夫や調整をおこなっている。

トラブル回避術としてまず目につくのは、酒狩りをおこなう人びとが外部社会に向けて飲酒の権利を訴えないことである。彼らは好んで飲酒する一方で、「酒は毒。よくないものだ。」と口を揃えていう。また、酒の規制や管理にも表立って反対しない。彼らは飲酒の権利を主張するどころか、むしろ総じて熱心に禁酒運動に取り組んでいる。例えば、中央砂漠では酒に関する地域レベルの取り組みとして、先住民が主導でポピュラー音楽の制作をおこなう録音プロジェクトがよく知られる。このプロジェクトには多額の政府資金が投入され、中央砂漠で広く展開している。酒にまつわる物語やメッセージが込められた現地語の楽曲は、現地社会で親しまれ浸透しやすく、その有効性が高く評価されている (Carfoot 2016)。アナング社会でも青年たちが作曲、演奏、録音した楽曲は様々な機会で見られ、老若男女問わず人気が高い<sup>18)</sup>。

しかし、いわずもがなであるが、楽曲の人気、浸透度の高さは酒を断つことには簡単に結びつかない。人びとは酒の危険性を口ずさみながら、拍子抜けするくらいあっけらかんと酒を飲む。その姿をみると、彼らの問題飲酒の取り組みは意味をなしていないようにみえる。だが、ここで注意を払いたいのは、彼らが自らの飲酒行為を正当化していないという点である。彼らは酒に対して「タブレット (tablet)」という隠語を使用する。「タブレット」とは、日常生活において西洋由来の錠剤を指し、アナングの伝統的治療である「ブッシュ・メディスン (bush medicine)」とは明確に区別される。この「タブレット」という隠語には、皮肉や言葉遊びの要素も含まれるが、それ以上に酒への執着心を隠そうとする姿勢がみてとれる。

### 事例 酒ではなく薬

アナング女性 MS は酒を探しに行く際、「そろそろ頭が痛くなってきたから、『タブレット』を手に入れよう」という。これに対して、筆者が「そういつても酒を探しに出かけるよね。それって酒狩りでしょう (You always go out looking for grog saying that, don't you? It would be hunting for grog.)」とからかった。私はユーモアたっぷりの MS なら、このからかいにのってきけると期待していた。しかし、MS からは「いや、ただ単に『タブレット』を手に入れるだけだ (No, we

are just getting tablets.）」とそっけない返事が返ってくるばかりであった（フィールドノート 2019年2月22日）。

上記のように、たわいもない日常の会話の中であっても、「タブレット」は「酒」には置換されず、「酒狩り」といった直接的な表現も意図的に避けられる。ここに示されるのは、文化的に「肯定される飲酒」など存在しないという彼らの揺るがない態度や姿勢である。人びとはたとえ毎日、酒を飲んでいたとしても、決して開き直っているわけではなく、逸脱しないように常に気を配っている。

人びとは「酒はよくない」と捉えているからこそ、「タブレットを手に入れる」という隠語によって規範をそらしつつ酒を獲得する。社会関係の維持・再生産が重要視されるアボリジニ社会では、かつてより社会規範と自身の欲求のバランスをとる方法として嘘やごまかしが多用されてきた。ピーターソンは、アボリジニ社会ではあからさまな嘘やごまかしであっても、他者への直接的な拒絶でないことが、周囲との関係を保たせる上で重要であると指摘している（Peterson 2013: 172）。この点をふまえると、飲酒者の皮肉や言葉遊びともとれる「タブレットを手に入れる」という表現は、酒を求めつつも、その行為を簡単に肯定しない態度を示すことによって、周囲との直接的な対立を避け、社会関係の維持・再生産につとめる人びとの調整や工夫ともとれる。

## 5.2 他者への配慮

さらにアナングの多くが酒に執着する一方で、周囲との関係を保つことにも気を配る。その際、重要視されるのが「世話の関係」である。酒狩りでリーダーシップを発揮したMSは、日常生活の中で度々、世話の関係の大切さを強調した。

### 事例 世話の関係

私が彼らの世話をするから、彼らも私の世話をしてくれる。愛したら、愛される、だ。これが私たちの「ウェイ (way)」(フィールドノート 2019年2月26日) よ。

アナング社会では世話をして、世話をされるという関係を築くことが「正しいやり方 (ウェイ)」とされる。アボリジニの「世話をする」という概念について、

西部砂漠のピントゥピを調査した人類学者マイヤースは、特定の相手の世話をするのはアボリジニの社会的な義務であると指摘している (Myers 1991[1986])。ピントゥピ社会には「世話をする」というイデオロギーを介在して、年配者と若者という世代間や家庭内の男女間に階層的な差が存在する。これは、ウッドバーンが示した「平等社会 (egalitarian society)」(Woodburn 1982)、すなわち、階層的な社会組織や社会的地位をもたず、チーフやヘッドマンといった政治的リーダーも存在しないような狩猟採集社会とは異なる。この階層性が儀礼や聖地、婚姻といったピントゥピの日常世界を持続させる働きを持つとマイヤースは論じた。

しかし、こうした「世話をする」という概念や階層性は不変の構造ではない。中央オーストラリアのアランダを調査するオスティン＝ブロス (Austin-Broos 2006) によると、資本主義や福祉政策の進展にともない、伝統的な世話の関係は形骸化し、誰であっても世話をすることが要求されるような状況が生み出されている<sup>19)</sup>。アランダの日常においても、時に非先住民の友人や観光客まで含みこむような偶発的、戦略的かつ実用的な世話の関係が生活の基盤となっている。

しかし、酒狩りをおこなう人びとにとって「世話をする」という義務を果たすことは容易ではない。酒は依存性の強く酩酊作用のある物質であるため、十分に注意を払っていても、自分の欲求を完全にコントロールするのは困難である。酒を目前にすると個人の受益に向かってしまうことも多々ある。そんな時、分配の不履行から注意をそらすために、事後的な帳尻合わせがおこなわれる。

### 事例 帳尻合わせ

キャンパス売りに成功した MS は、まとまった金額の現金を手に入れたため、仲間と協働して酒を大量に入手した。その直後、分け前を手にした MS は夫 SC のもとに戻りたいから車で送ってくれと話した。しかし、酒狩りが継続されることを知ると、その場にとどまり、結局 SC のもとに戻ることにはなかった。理由を尋ねると「きっと SC は別の女のところに行ってしまったにちがいない」と不機嫌そうにつぶやいた。そのまま酒宴の場に残った MS は一晩中、仲間と酒を飲み続けた。

翌々日、MS は、SC の欲しがっていたイヤホンを「SC のために」と購入して帰路についた。その日、MS は普段よりも丁寧に家の清掃をこなし、珍しく甥

子や姪っ子の世話をして過ごした（フィールドノート 2019 年 2 月 24 日）。

MS の夫 SC は、MS がキャンパス売りに出かけたことは知っており、彼女が酒を獲得して戻ってくることを期待していたことが予想される。MS も酒の分配がおこなわれた際に、SC のためにといくらかの酒を自身のカバンの中にしまっていた。このことから、少なくとも MS は夫の世話をしようとしていたことがうかがえる。

ところが、その夫への思いは酒を目の前にして突如、覆された。こうした裏切りは SC の嫉妬を呼び起こすものであり、災いの種となりうる。トラブルを起こしたくない MS は相手の欲するものを与えたり小さな子供の世話をしたりといった償いをするすることで、酒の分配の不履行を補った。この補填は、分配を期待していた SC やその家族に世話をしたということを示すための意識的な演出として捉えることができる。

### 5.3 協力者の確保

こうした世話の関係の演出は、協力者の確保を成功させる上でも欠かせない要素となっている。協力者との交渉では、個人的なつながりがあるかどうかが重視される。その詳細は明かされないことが多いが、ここでは筆者が懇意にしていた数少ない協力者の語りをみていこう。

#### 事例 協力する相手の選別

MS や DS の協力者である KL<sup>20</sup> はアナング女性 JW を母親に、白人男性を父親にもつ混血のアボリジニである。彼女はアリス・スプリングスの禁酒区域外の家屋に居住していたため、酒屋への入店が可能であった。KL は転売する相手の選別について以下のように話した。

誰にでも酒を買ってあげるわけじゃないわ。子供の世話もしないといけないし（KL には 1 歳になる子供がいる）、頼まれる度を買っていたら、きりがないでしょう。私が酒を買うのは、イマンバの人たちだけよ。彼らは私の家族だからね。でも、TB には買わない。彼女は飲むとおかしくなってトラブルを起こすから。この前も、夜中に酔っばらって大暴れしてとても困ったわ。MS や DS は大丈夫。彼らは酒を飲んでも人を困らせることをしない。

（フィールドノート 2014 年 7 月 22 日）

KLはイマンパ・コミュニティ出身者だけに酒を買ってあげると話すが、実のところ、イマンパ・コミュニティ出身者全員に同じような対応をするのではなく、その範囲を信頼の程度によって変えている。TBのようにトラブルを起こす者とは距離を置き、協力を求められても断ることがあるが、MSやDSのように、トラブルを起こさない者には協力的である。

協力者にとって依頼主が信頼にたる人物であるかどうかは、転売を引き受ける際の重要な判断材料となる。転売行為は相応のリスクと負担を負うものである。酒屋の前では警官が客の出入りを監視しており、毎日酒を大量に仕入れるとかなり不審がられる。アリス・スプリングスのような小都市では、警官ともすぐ顔見知りになるため、酒屋で酒を大量に入手して転売するのは困難であろうことは容易に想像できる。こうしたリスクを負ってまで、アナングの人びとを助けるのは「家族だから」とKLは説明する。MSたちもまたKLのことを「家族」と呼び、世話の関係にあることを強調する。

このようにプライベート・セリングは販売業とは異なり、相互の信頼関係が前提となっている。信頼関係が要となるプライベート・セリングの扉は個人的なつながりをもった者がいなければ開かれぬ。そのため、酒を求める人びとは協力者からの信頼を得るため、普段から周囲に気遣い、模範的な態度で接することが求められる。「毒」である酒は人から思いやりを奪い去るものだからこそ、酒狩りをおこなう人びとはより一層、正しくふるまうように方向づけられるのである。

## 6 規範と飲酒欲求の両立

以上の事例から示されたのは、社会規範と飲酒欲求の狭間で、アナングたちが周囲に気をつかい、隠語やごまかしなど様々な工夫をこらすことによって、自らが逸脱していないことを周囲に示しながら酒を入手しているということであった。ますます厳しくなる規制と管理のもとで、円滑に酒を獲得するには家族や協力者の手助けが必要不可欠である。

ところが、酒の転売にはリスクや負担が付いてまわるため、家族や協力者の手助けを得られるかどうかは、相手の気分や状況次第である。加えて、酒の獲得の過程では、自分の利益を優先してしまうことで不和や対立が生じやすく、関係構

築自体が危うい。こうした不確実性を補うために普段から正しくふるまい、周囲の人びとの信頼を得ておくことが、酒を手に入れる過程において重要視されていた。そうした中で方向付けられる狩猟採集を想起させる行動のあり方はハビトゥスというよりも、自らの不正や逸脱をごまかすための意識的な演出の色合いが強い。

さらに酒の獲得の過程では、家族から転売の協力者にいたるまで酒の獲得にかかわる多様な人びとが、広く世話の関係を築いていた。こうした世話の関係は、かつての年配者と若者の間で確認された伝統的知識を授与する関係とは大きく異なる。このような世話の関係の変化を憂う先住民の声もあがっているため、従来のアルコール研究では、酒の獲得をめぐる一連の行為は「文化喪失」の言説で簡単に説明されがちであった。

しかし、事例で示されたように、酒を獲得する過程においても彼らの「ウェイ」が必ずしも放棄されているわけでもなかった。むしろ文化復興への意識は高まっており、無用なトラブルを起こさないように酒の分配の不履行などの逸脱行為を覆い隠すための調整や工夫が盛んにおこなわれていた。それは場当たりのともいえるトラブル回避術であり、「ブラックフェラ・ウェイ」として公然と語られるような、主流社会への抵抗とは異なるものであった。しかしだからこそ、そこに状況応答的な創意工夫が生み出され、自らの文化アイデンティティを自覚する機会がもたらされていた。「白人の毒」といわれる酒を手に入れることが、彼らの文化アイデンティティの維持に深くかかわっていることは、狩猟採集という生業活動の新たな変化としても注目に値するだろう<sup>21)</sup>。

また、こうした調整や工夫を議論する上で忘れてはいけないのは、彼らが酒の流通を止められず、かといって外部社会との交流を断つこともできない袋小路に身を置いているということである。従来の文化喪失を前提とした見方では、近代化の波にのまれた悲惨な「犠牲者」像を再生産することができても、こうした袋小路でトラブルを解消しようと試行錯誤する大多数の人たちの細かな営みを捉えることは難しかった。中央砂漠では1990年代より、アナング中年層が中心となって、酒が流通する環境に適応するための方法が模索されている。そんな中で生み出された酒狩りは、彼らにとって社会規範と飲酒欲求のバランスをとるための苦肉の策であり、家族や協力者に対して自らのアボリジニ性を示すための戦略的な演出であったと考えられる。

こうしたトラブルを避ける技法は結果的に人びとに酒をもたらしものであるため、アナング社会において全面的に否定はされないが、肯定もされにくい。だが、彼らの社会関係の均衡をかりうじてでも保つものであるならば、それは文化喪失の末路ではなく、社会規範と飲酒欲求を両立するための新たな選択と決断であり、ポスト植民地状況を生き抜くための彼ら独自のやり方と考えることも可能だろう。

## 7 おわりに

本稿では、アナングの酒狩りをとりあげ、ごまかしや隠語、他者への配慮、帳尻合わせといった調整や工夫のあり方について考察した。それをもとに、規範と飲酒欲求の間で揺れ動く人びとの選択や決断について議論した。

酒はアナングの社会や文化を破壊するものと認識されるため、規制や制限は基本的に受け入れられる。人びとはコミュニティでは思うように酒を飲むことができないため、都市に出かけて協力者を見つけ出し、酒を転売してもらうしかない。その過程では、協力してくれる家族や友達を気遣い、世話をしようとする人びとの姿が捉えられた。さらに、トラブルを起こしてしまった際も、それを補填しようとする人びとの姿もみられた。こうした人びとが選択するのは、狩猟採集の過程を想起させる、彼らにとっての「正しい」ふるまいであった。

そこから明らかになったのは、アナングの間で酒が文化を破壊する「毒」とみなされているからこそ、酒の獲得の過程において模範的な態度がとられるということである。彼らは酒を手に入れる際に、時と場合に応じて創意工夫を重ねながら集団で助け合うことで、周囲に対して自らが逸脱していないことを示していた。その協働の姿勢は、アナングの間で最も重要視される「ウェイ」である。この模範的なふるまいによって、周囲の人びととの不和や対立を避けながら酒を入手することが可能となった。このことは、酒の毒性が強調されればされるほど、その毒性を相殺するために適正な酒の獲得、すなわち、酒狩りにより高い価値が置かれるようになる可能性を示している。

本稿で示したのは、酒狩りの過程で重ねられる状況応答的なブラックフェラ・ウェイであり、ポスト植民地時代に生きる人びとの新たな選択と決断であった。しかし実際には、人びとの選択や決断がいつも周囲の人びとに受け入れられるば

かりではない。酒狩りの過程では場当たりの帳尻合わせでは解消されないようなレベルのトラブルもよく発生する。こうした暴力事件や警察沙汰に発展するような深刻なトラブルに対する人びとの対処については本稿では扱わなかった。また、2022年7月には北部準州緊急措置が終了し、連邦政府による一律の制限は解除され、その扱い方が各アボリジニ・コミュニティの判断に委ねられるという大きな変化も起こっている<sup>22)</sup>。これらの変化に人びとがどう対処するのか、その新たな選択と決断については別稿で論じたい。

## 謝 辞

本稿は2020年に神戸大学に提出された博士論文の一部を大幅に改稿したものである。博士論文の執筆の過程では、梅屋潔先生、岡田浩樹先生、窪田幸子先生、齋藤剛先生、柴田佳子先生、石森大知先生にご指導を頂いた。また、本稿のもととなる現地調査は、日本学術振興会、澁澤民族学振興基金からの助成により実現した。改稿に際し、3名の匿名査読者から貴重なご助言を賜った。調査地の人びとを始め、ご助力頂いたすべての方々に対して、ここに深く感謝申し上げる。

## 注

- 1) 「酒狩り」とは筆者が定めた用語で、狩猟採集に近いやり方で酒を獲得することを意味する。現地では、狩猟採集の行動様式が様々な資源を手に入れるプロセスに見られ、その行為に「狩り」という用語が当てられることもあるが、酒に関しては「狩り」という用語は用いられず、むしろ否定されることもある。なぜならそれは公の場で「酒狩り」というと、酒の獲得のために狩猟採集の知識やスキルを活用することを容認しているような印象を周囲に与えてしまうからである。そうした事態を避けるために、酒を求める人びとは狩猟採集の時のようにふるまいつつ、それは「狩り」ではないと語る。これにより、自らが逸脱していないことを示しながら酒を手に入れることを可能にする。このような明示的でない工夫や調整のあり方に焦点をあてるため、本稿では彼らの酒の獲得をあえて「酒狩り」と呼んでいる。
- 2) オーストラリア北部準州における飲酒規制について、白人入植から2007年の北部準州緊急措置までは、平野（2013）に詳述。北部準州緊急措置以降の飲酒規制の展開については、平野（2015）に整理した。
- 3) 人類学者のブレイディは、飲酒規制の内容を「ベストとは言えない方法（Not Exactly Best Practice）」と述べ、一部のアボリジニに対する場当たりの規制のあり方を批判し、アルコール業界に介入しない国家体制の矛盾を批判した。ただし、飲酒がアボリジニにとって解決されるべき問題であるという前提は否定せず、国家介入の必要性を承認したうえで現地の人びととの連携を強化することの重要性を論じている。さらに、WHOのアルコール政策、例えば、酒類の価格設定や課税方法の見直し、飲酒運転対策の強化、治療・教育・飲酒状況の改善に向けた最善策の検討などの有効性も示している（Brady 2007）。
- 4) イマンパ・コミュニティは世界遺産のウルルと観光都市アリス・スプリングスのほぼ中間地点に位置するアボリジニ自治区である。1979年に設立され、中央砂漠における複数の言語集団の集住地のひとつとなった。2007年の北部準州緊急措置で特に介入の必要性が高いとされた5カ所の重点コミュニティのひとつにもあげられる。イマンパ・コミュニティでは、人

びとのあいだで「酒はよくない」という意見が異口同音に語られる。だが実のところ住民の大半が習慣的飲酒者である。量や頻度にはかなりの幅があるものの酒を飲まない者はほとんどいない。イマンパ・コミュニティに暮らす人びとの中で酒を全く飲まないのは筆者の把握する限り3名のみ（成人）である。

- 5) アナングは複数の方言集団（ピチャンチャチャラ（Pitjantjatjara）、ヤンクンチャチャラ（Yankunytjatjara）、ナガチャチャラ（Ngaatjatjara）、ルリチャ（Luritja））の総称と説明されるが、生活の中では同じ論理を共有する者の意で使用されることもある。
- 6) 筆者は子連れ調査をおこなったため、中年層（40～50代）のアナング夫婦と過ごすことが多く、収集した事例も中年層の酒狩りが中心となった。中年層の酒狩りに参加する若者もいたが、基本的に若者は若者同士で行動することが多く、若者の酒の獲得については不明な点が多い。中年層によると、アナングの若者は酒より薬物を好むそうである。
- 7) ハワード保守連立政権は、政治的経済的に主流社会から取り残されているアボリジニを「主流化」という建前のもとに、次々と対アボリジニ政策を変革し、その権利を制限していく方向に転じた。2005年には先住民委員会を解体し、アボリジニ関連事業を他の各省庁に吸収し、2006年にはアボリジニ土地権法を改正した。
- 8) この時、「みんなと一緒にいたいし、頼まれると断ることができない」と難渋した筆者に対して女性は「警察に捕まるから酒を買うことはできないと言いなさい」と諭した。実際に、そう断ると納得され、転売の協力を無理強いされることはほとんどなかった。このように本稿は、酒飲みとつきあひながら、禁酒主義者との関係も保とうとする両義的な調査者の立場から書かれたものである。
- 9) アボリジニ社会に限らず、カナダのイヌイット社会においても同様の変化がみられる。北西準州のホルマンで調査をおこなったスタンによると、イヌイットにとって狩猟や採集は重要な食料獲得手段であるが、カナダ南部から搬送されてくる食品を入手できるようになったことや食事の嗜好が変化してきたことから、カントリー・フード（狩猟採集によって得られる生存のための食料の意）の重要性は以前と比べれば低下している。さらにイヌイットの若者の間では生業離れと生業のレジャー（レクリエーション）化が進んでいることや生業が生存のための手段としてよりもイヌイットとしてのアイデンティティを自覚し、維持する手段となっている（Stern 2000; 岸上 2008: 544）。
- 10) 中央砂漠では、ブッシュに放置されている故障車のタイヤを取りに行くことを、語呂遊びで「ピッキング・ブッシュタイヤ（ブッシュタイヤの採集）」ということがある。
- 11) イマンパ・コミュニティから車で15分ほどのところにあるロードハウスのレストランでは、食事を1品頼むと、アルコール飲料最大4缶まで注文することができるというルールがある。このルールは、2009年、イマンパ・コミュニティの住民によって定められた。
- 12) イマンパ・コミュニティに暮らす人びとにとって、酒が最も安価にたくさん入手できるのはアリス・スプリングスである。アリス・スプリングスではワインやジン、ウイスキーなど辺境のロードハウスでは取り扱いの少ないハードリカーを手に入れることもできる。都市にはたくさんの観光客が訪れるので、キャンパス（アボリジニ・アート）もよく売れる。こうして稼いだ現金の多くが酒の購入資金となる。
- 13) イマンパ・コミュニティとアリス・スプリングス間のハイウェイ・バスは週2回運行され、片道20ドル（約2,000円）かかる。
- 14) 土曜日は平日と異なり、酒屋の開店時間は午前10時～午後9時のため、午前中からすでに落ち着かない雰囲気になる。逆に日曜は酒屋が終日閉店のため、バーやクラブに向かうか、コミュニティに戻る人が多い。
- 15) アナング社会ではフィンガー・ジェスチャーによる交流が盛んにおこなわれる。アナングの人びとは視力に優れている人が多く、フィンガー・ジェスチャーは狩猟の際の無言のコミュニケーションに欠かせない。都市で酒狩りをおこなう際にもフィンガー・ジェスチャーがよく使われる。
- 16) 酒の転売の交渉時はMSに目をふせておくように度々注意された。ただ、「じろじろ見るな」と怒られるのは交渉時だけで、アボリジニ集住地の出入り自体は特に注意を受けることはなかった。
- 17) ピーターソンは「辺境のアボリジニ・コミュニティの多くが近代国民国家にすっかり包摂され、人びとは生業としての狩猟採集を放棄してしまったのは事実だが、アボリジニが狩猟採集民でなくなったとはいえない」と指摘している（Peterson 1999: 67）。

- 18) 「イワンチャ (IWANTJA)」という音楽グループの CD『パーリャ (PALYA)』に収録されている「ワングル (WAMNGURU: 酒)」という楽曲の歌詞は下記の通りである。
- Nyaaku nyuntu ananyi* なぜあなたは行ってしまうのか  
*Nyaratja wamaku* 酒を求めて  
*Kulingma nyuntumpa* 家族のことを思い出して  
*Waltja tjuta ngurangka* ホームのことを  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が死んでしまった  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が殺された  
*Wamanguru,* 酒のせいで  
*Wamanguru* 酒のせいで  
*Tjukurpa tjituru tjituru ngaraku* ちょっと待って、ゆっくり話をきいて  
*Wanyu kulila purларaringama* さもないと、悲しい話になってしまう  
*Waltjangku atunmara puntu nyuntumpa kulila kulila* 自分を大切に、きいて、きいて  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が死んでしまった  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が殺された  
*Wamanguru,* 酒のせいで  
*Wamanguru* 酒のせいで  
*Nyaaku nyuntu ananyi* なぜあなたは行ってしまうの  
*Nyaratja wamaku* 酒を求めて  
*Kulingma nyuntumpa* 家族のことを思い出して  
*Waltja tjuta ngurangka* ホームのことを  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が死んでしまった  
*Anangu tjuta wiyanu* たくさんの人が殺された  
*Wamanguru,* 酒のせいで  
*Wamanguru* 酒のせいで
- 19) オスティン＝ブロス (Austin Broos 2006) はハーマンズバーグに暮らすアラントの仕事との関わり方の事例から、彼らがただ仕事をしているのではなく、「誰かのために働く」ことを重要視していると論じた。アラント社会には本格的に市場経済に関わる者はほとんどおらず、いたとしても気まぐれであった。こうした一見怠惰にみえるアラントの労働状況を理解するために必要なのは、彼らにとって、仕事は「世話をする」という相互義務を生み出すものであり、その義務は仕事を越えて生活全般に広がっているということである。これは言い換えると、アボリジニ社会における「世話をする」という概念が外部社会の影響を受けない不変の構造を持つのではなく、日常実践の生成や維持、変容と広く結びつくということである。
- 20) KL の父親は英国系白人、母親はイマンパ・コミュニティ出身のアナング女性である。父親が開拓のため訪れたマウント・エベネザ (イマンパ・コミュニティから約 20km の地点に位置するロードハウス) で KL の母親と出会い、2 女をもうけた。KL は長女である。2 女は幼少期に父方の祖父母に引き取られアデレードで育ったため、アボリジニ言語を話さないが、両親に会いにイマンパ・コミュニティやマウント・エベネザを訪れるため、イマンパ・コミュニティの人びととの親交が深い。
- 21) 岸上 (2007) は、アラスカのイヌピアットのホッキョククジラ猟の事例から、ホッキョククジラの捕獲や肉の分配・流通・消費が、イヌピアットにとって、食料資源の入手のみならず、民族表徴、アイデンティティの維持、世界観やジェンダー関係の再生産、社会関係の維持・再生産、健康の維持の諸効果があることを指摘している。これはカントリー・フードの重要性を示す論稿であるが、西洋由来の酒の分配・流通・消費がもたらす諸効果についても、今後さらなる検討が必要だろう。
- 22) Intervention-era alcohol bans have ended in the Northern Territory. Here's what that means, ABC News, 16 Jul 2022, <https://www.abc.net.au/news/2022-07-16/nt-intervention-era-alcohol-bans-ending-what-changes-mean/101242252> (2022 年 10 月 16 日閲覧)

## 参考文献

### 〈日本語〉

大野あきこ

- 2009 『『マルチカルチュラル』 オーストラリアにおける人類学』『国立民族学博物館研究報告』 33(3): 359-395。

岸上伸啓

- 2003 「狩猟採集民社会における食物分配—諸研究の紹介と批判的検討」『国立民族学博物館研究報告』 27(4): 725-752。

- 2007 「クジラ資源はだれのものか—アラスカ北西部における先住民捕鯨をめぐるポリティカル・エコノミー」秋道智彌編『資源とコモンズ』（資源人類学 8） pp. 115-136, 東京：弘文堂。

- 2008 「文化人類学的生業論—極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』 32(4): 529-578。

栗田梨津子

- 2018 『多文化国家オーストラリアの都市先住民—アイデンティティの支配に対する交渉と抵抗』 東京：明石書店。

小山修三

- 1996 「狩猟採集民社会研究の諸問題—第8回 CHAGS 会議の日本における開催の機に」『民族学研究』 61(2): 295-301。

ピーターソン, N.

- 2002 「近代国家の中の狩猟採集民—オーストラリアの人類学」保莉実訳, 小山修三・窪田幸子編『多文化国家の先住民—オーストラリア・アボリジニの現在』 pp. 261-283, 東京：世界思想社。

平野智佳子

- 2013 「北部準州アボリジニ社会における『先住民』『非先住民』関係の構図—『問題飲酒』に関する人類学的研究の展開」『文化人類学』 78(2): 265-277。

- 2015 『『アボリジニ』『白人』の対立というカテゴリー化の限界—オーストラリア北部準州におけるアボリジニへの飲酒規制の緩和をめぐる意見の対立から』『神戸文化人類学研究』 5: 3-27。

- 2019 「人と関わりをもたない犬?—オーストラリア先住民アボリジニとディンゴ」大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』 pp. 164-168, 東京：勉誠出版。

- 2021 「分配行為にみるアナンクのやり方—オーストラリア中央砂漠アボリジニのキャンバス販売と酒の購入資金の獲得の分析から」『文化人類学』 86(2): 177-196。

松山利夫

- 2006 『ブラックフェラウェイ—オーストラリア先住民アボリジナルの選択』 東京：御茶の水書房。

### 〈外国語〉

Austin-Broos, D.

- 2006 'Working for' and 'Working' among Western Arrernte in Central Australia. *Oceania* 76(1): 1-15.

Beckett, J.

- 1964 Aborigines, Alcohol, and Assimilation. In M. Reay (ed.) *Aborigines Now: New Perspective in the Study of Aboriginal Communities*, pp. 32-47. Sydney: Angus and Robertson.

Brady, M.

- 2007 Alcohol Regulation and the Emergency Intervention: Not Exactly Best Practice. *Dialogue* (Academy of the Social Sciences in Australia) 26(3): 59-65.

Bryce, S. (ed.)

- 1992 *Women's Gathering and Hunting: In the Pitjantjatjara Homelands*. Alice Springs: I ad Press.

- Carfoot, G.  
 2016 'Enough is Enough': Songs and Messages about Alcohol in Remote Central Australia. *Popular Music* 35(2): 222–230.
- Clifford, S., J. A. Smith, M. Livingston, C. J. C. Wright, K. E. Griffiths, and P. G. Miller  
 2021 A Historical Overview of Legislated Alcohol Policy in the Northern Territory of Australia: 1979–2021. *BMC Public Health* 21(1921): 1–18.
- Collmann, J.  
 1979 Social Order and the Exchange of Liquor: A Theory of Drinking among Australian Aborigines. *Journal of Anthropological Research* 35(2): 208–224.
- Durkheim, E.  
 1952 *Suicide: A Study in Sociology*. Translated by J. A. Spaulding and G. Simpson. London: Routledge and Kegan Paul.
- Hunter, E.  
 1993 *Aboriginal Health and History: Power and Prejudice in Remote Australia*. Melbourne: Cambridge University Press.
- Kahn, M. W. H., E. Hunter, N. Heather, and J. Tebbutt (eds.)  
 1991 Australian Aborigines and Alcohol: A Review. *Drug and Alcohol Review* 10(4): 351–366.
- McKnight, D.  
 2002 *From Hunting to Drinking: The Devastating Effects of Alcohol on an Australian Aboriginal Community*. New York: Routledge.
- Moore, D.  
 1992 Beyond the Bottle: Introducing Anthropological Debate to Research into Aboriginal Alcohol Use. *Australian Journal of Social Issues* 27(3): 173–193.
- Myers, F.  
 1991[1986] *Pintupi Country, Pintupi Self: Sentiment, Place, and Politics among Western Desert Aborigines*. Berkeley: University of California Press.
- Peterson, N.  
 1991 Cash, Commoditisation and Authenticity: When Do Aboriginal People Stop Being Hunter-Gatherers? In N. Peterson and T. Matsuyama (eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies 30), pp. 67–90. Osaka: National Museum of Ethnology.  
 1999 Hunter-Gatherers in First World Nation States: Bringing Anthropology Home. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 23(4): 847–861.  
 2013 On the Persistence of Sharing: Personhood, Asymmetrical Reciprocity, and Demand Sharing in the Indigenous Australian Domestic Moral Economy. *The Australian Journal of Anthropology* 24(2): 166–176.
- Room, R.  
 1984 Alcohol and Ethnography: A Case of Problem Deflation? *Current Anthropology* 25(2): 169–191.
- Rose, F.  
 1965 *The Wind of Change in Central Australia: The Aborigines at Angas Downs, 1962*. Berlin: Akademie Verlag.
- Saggers, S. and D. Gray  
 1998 *Dealing with Alcohol: Indigenous Usage in Australia, New Zealand and Canada*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schwab, R. G.  
 1991 The “Blackfella Way”: Ideology and Practice in an Urban Aboriginal Community. Ph.D. Thesis, Australian National University.
- Stern, P.  
 2000 Subsistence: Work and Leisure. *Études/Inuit/Studies* 24(1): 9–24.
- Woodburn, J. C.  
 1982 Egalitarian Societies. *Man* 17(3): 431–451.